



記念講演

同志社の過去・現在・未来

大谷 實

同志社総長



苦難の同志社 黎明期と 守り抜かれた建学の精神

本日はホームカミングデー、ようこそ同志社にお帰りくださいました。心から歓迎申し上げます。今年は同志社創立130周年の記念の年にあたります。そこで今日は同志社の過去を振り返り現在を直視して、未来に目を向けていただき、同志社のあるべき方向についてご一緒にお考えいただければと思っております。

安中藩の下級武士の子であった新島七五三太は、青雲の志を抱いて海外遊学を試み、江戸品川沖に停泊中の快風丸に乗船し、函館に向かって出帆いたしました。彼はその時の心境を歌にして二首遺しています。一つは、「錦きずばいかで帰らじ故郷を 思わず偲ぶけさの嵐に」、もう一つは「武士の思い立田の山紅葉に とききざればなど帰るべき」というものです。それから3カ月後の7月18日早朝、新島は当時極刑に処せられる国禁を破って国外に脱出し、アメリカで約9年間、文字どおり勉学に励みました。そして正

規の牧師の資格を取り、幅広い、しかも奥深い教養とキリスト教の信仰という「錦」を飾りまして、教育こそ文明の基であるという信念を抱き、名前も襄と改めて、1874年11月26日、横浜に帰国したのです。

新島は寺町丸太町に一軒の家を借り、これを仮校舎としました。1875年11月29日早朝8時、宣教師デイヴィスと6人の生徒が新島の家に集まり、新島は涙とともに熱い祈りを捧げ、同志社の創立を神と世界に向かって宣言しました。デイヴィスは後に「新島が涙の中に捧げた

誠実にして懇篤な祈りは、私にとって終生忘れることのできないものであった」と記しています。こうして「官許同志社英学校」が誕生したのです。

同志社の創立はしかし、新島にとつて非常な苦しみの始まりでもありません。京都仏教会からの猛烈な反対運動、京都府側の消極的な姿勢と聖書教育の制限、社会からの敵視。新島の活動の母体となっていたアメリカン・ボード宣教師団との対立も新島を非常に苦しめたといわれています。新島はこうしたいくつもの障害に悩まされながら今出川校地に本格的な校舎を建設して、同志社英学校を軌道に乗せることに成功したのです。続いて1876年には女子教育の重要性を訴えて現在の同志社女子大学を開設。1887年には医学教育をめざして同志社病院の仮診療所を設置し、同時に京都看病婦学校を開設しました。

新島は牧師として教会建設や説教活動を展開しながら、学校建設に精力的に取り組むのですが、新島の本当の願いは同志社大学の設立でありました。その決意は、1888年に全国の主な新聞雑誌に

発表した、有名な「同志社大学設立の旨意」という文章のなかで力強く示されています。そして、この年を最後に、同志社はアメリカン・ボードから独立し、ミッションスクールであることを止めました。

彼は同志社教育の目的は「その徳性を涵養し、その品行を高尚ならしめ、その精神を正大ならしめんことを勉め、独り技芸才能ある人物を教育するに止まらず、所謂の良心を手腕に運用するの人物を出さん事を勉めたりき」と申しまして、良心教育の重要性を訴えたのであります。

ただいまの同志社大学設立の旨意からもわかりますように、現在の同志社はキリスト教主義の学校ではありませんが、キリスト教の布教を目的とするミッションスクールではありません。一方、新島はキリスト教主義教育を『良心教育』と捉えました。新島はキリスト教の布教をめざした当初の意図をより一層発展させて、この良心教育を建学の精神とし、同志社大学はこの建学の精神を基に地の塩、世の光として活躍する数多の人材を世に送り出してきました。しかし、彼の

畢生の事業でありました大学が設立されましたのは、彼の死後、実に30年が経過してからでした。

戦後の発展期から 大学「生き残り」の時代へ

戦後になりましたからも、学園内の対立や大学紛争の影響もありまして、同志社は決して平坦な道を歩んだわけではありません。しかし、戦後のベビーブームによる進学者数の増加といった社会の変化に後押しされ、1960年代に入りますと同志社は急速に発展いたします。大学でのマスプロ化は同志社でも顕著となりましたが、高いレベルの学術研究を基礎としてきた良心教育の歴史と伝統に支えられ、法人全体の研究・教育の比較的安全した時代を迎えることができました。こうして学校法人同志社は現在、大学で学生数が2万5000人、女子大が6000人。五中高、幼稚園併せて11の学校となり、約3万7000人が学ぶ一大総合学園に発展いたしました。

もつとも、同志社大学では、長い間、新制大学が始まった時の6学部のみまで

した。大学のキャンパス移転や、数年間続きました内部の不平等な紛争も原因となつて学園の改革はかなり遅れたのです。しかし、ここ数年の間、各学校の努力でようやく学園内に活気が戻りました。新学部の開設や学部改編、京田辺キャンパスの整備など、学校改革、教育改革を軌道に乗せることができました。さらに産官学連携によりまず教育研究の推進と社会貢献体制も、いわゆるリエゾンオフィスの立ち上げによって整備することができました。そして、社会的要請に応えるコースクールとビジネススクールが新しい寒梅館に作られました。女子大学も4学部9学科体制となり、日本有数の女子総合大学になりました。特に新島以来の同志社待望の医学系学部であります薬学部が昨年4月に新設され、非常に人気を呼んでいることにも注目すべきです。

このように学校法人同志社はいろいろな改革を打ち出しながら躍動、躍進し、雄飛しつつあります。しかし、学園の発展を確固としたものするためには、今後、大きな困難が待ち受けていることも確かです。少子化や国公立学校の改革により、

私立学校を取り巻く教育環境は大きく変わつてまいりました。大学の産官学協同や地域との連携の強化、国際化への対応、そして学園に対する第三者評価が加わり、今や私立学校はどこも混沌とした状況にあると思います。新島は私学同志社が完成するためには2000年を要すると予言しました。今後私学が生き残り、その存在理由を発揮するためには、私学としての「独自一己の気象」「自治自立」の人物の養成に力強く立ち向かう必要があると私は思っております。つまり70年後の同志社の完成のために、私学固有の特色、アイデンティティーを前面に押し出した教学の理念が問われるとともに、その実践が求められているのではない

か。具体的には当面三つの点が重要であると私は考えます。一つは良心教育の一層の推進、二つ目は産業界・官界を中心とした社会全体との連携の強化、三つ目は校友・同窓との連携の促進です。時間の関係で、本日は二つ目は省きますので、お許しください。

方がしっかりとっていない。これは一人っ子時代の競争意識の低下、あるいは少子化時代の家庭教育とも関係すると思いますが、積極性、チャレンジ精神、熱意が欠けているように思われて仕方ないのです。21世紀は心の時代、倫理、さらには生き方の時代といわれていますが、創立者新島襄がめざした良心教育、「天真爛漫として自由のうち自ら秩序を得、不羈の内自ら裁制あり、即ち独自一己の見識を備え、仰いで天に愧ず、俯して地に愧じず」、良心の全身に充滿した丈夫(ますらお)の養成をめざす良心教育、これを改めて強調すべきだと私は考えています。

今日の教育におきまして最も欠落しているのは、知育に伴うべき正しい徳育であると言われているから久しいのですが、教育の目的は、各人の個性を伸ばし、その可能性を発揮させることによって最終的にそれぞれが一人の人間として幸せになれるようにすることだと私は考えます。そしてその幸福は新島のいうキリスト教を基礎とした良心的な生き方、つまり人格の完成に向かって愛と希望に満

ちて人生行路を歩むこと、これこそが幸福に至る道ではないか。その意味で新島の良心教育こそ教育本来の理念に最も合致するものと私は確信します。キリスト教を基礎とした教育・研究により、地の塩、世の光となるべき高潔な人格をもつた同志社人を世に送り出すことが同志社の使命であり、現代社会への最大の貢献である。こうした教学の理念とその実践こそが、私学同志社の生きる道であると確信し、今後、私はこの良心教育を自信をもって推進する覚悟しております。

「校友・同窓のご支援を今後ともお願いいたします」

二つ目の校友・同窓との連携の強化ですが、約30万もの校友・同窓の多くは校友会や同窓会に属していないというのが現状であります。こういう方々との連携を緊密にすることは同志社の社会的評価を引き上げるのに大いに貢献しますが、それだけではなく学生の進路のため、また同志社の研究支援を促進する上でも計り知れない効果が期待されます。慶應義塾や早稲田に見られます寄付・募金制度

混沌の時代にこそ必要とされる良心教育の重要性

まず、良心教育の一層の推進ですが、同志社が創立2000年に向けてめざすべき目標は、依然としてキリスト教を中心とする徳育でなければいけません。もちろん優れた学生に同志社を受験してもらうための戦略や、卒業生をどういう人物として世に送り出し、どこに就職させるか、そのための教職員の自己管理も必要でしょう。こうして専門教育のレベルを引き上げ、優秀な学生を世に送り出さなければならぬと思っております。

以上のことはどの学校でも考えているわけですが、同志社で取り組むべき課題は、優れた学生が何を目的として働き、生きていくべきかに迷つているということ、一人ひとりの生き方自体が確立されていない点を重視し、その解決をめざす教育をすることではないでしょうか。時代は混沌し、国民の多くは何を目標として人生行路を歩んでいくべきかに思い悩んでいる。あるいは、人間としての生きを作れば財政的な支援も期待できるように。将来はできるだけそのような皆さんのご協力、ご支援を仰げるような体制を作ろうと思っております。

校友・同窓の皆さんに物心両面にわたるご支援をお願いするためには、同志社が母校として皆さんの存在をどのように位置づけ、どんな関係を構築していくかを明確にしなければなりません。そして生涯にわたり同志社は卒業生の皆さんとどのように関わり、支援させていたかどうかを検討し、その実施体制を築くことが一日も早く必要だと考えております。最近、同志社大学では将来構想委員会を設置して鋭意努力しております。学校法人同志社といたしましてもこれらを踏まえ、教育改革の後に来るものは何かというのを念頭に置きまして、同志社完成2000年の基本構想を喫緊の課題として検討したいと考えているところです。校友・同窓の皆さんの率直なご意見を賜りたいと願う次第でございます。

(2005年11月6日「創立130周年記念リユニオン・ホームカミングデー」、明徳館21番教室)

記念講演

新島襄の涙

野本 真也

同志社理事長



徳

富蘇峰は、新島襄永眠の追悼文のなかで「人間の与えうる最も高貴なものは血であり、その次に涙である」というラ・マルチャーヌの言葉を引用し、新島襄は涙の人であったと語っています。同志社は1875年11月29日午前8時、まさに「涙の人」新島襄の「涙あふれる祈り」によって歴史の歩みを始めました。

同志社創立130周年記念としてこのたび出版された『新島襄の手紙』のなかには、「涙」が10回も出てきます。新島襄全集では80回以上にもなります。新島襄の手紙で最初に「涙」について書かれているのは、父民治に宛てた1866年

2月21日付の手紙です。七五三太は両親や祖父父母など家族のことを思い、「感涙袖を湿し候」、「涙筆共に下り」と、家族への愛の涙を流しています。

新島襄は、しばしば感謝の涙、感激の涙を流しました。脱国してボストンに着いたとき、「私は船の持主であるハーデーイ様が私を学校へやって下さり、一切の経費をまかなって下さるかもしれないとうかがいました。船長がこのことをはじめて告げて下さったとき、私の両眼は涙にあふれました。まことにかたじけないことであります。私は思いました。神は私を見棄て給うことはないのだ、」と「脱国の理由書」に書いています。ま

た、文部理事官田中不二磨とヨーロッパの教育事情を視察していたとき、ハーデーイ夫妻から日本伝道へ献身するためにアンドーヴァー神学校に復学するなら全面的にサポートするという手紙を受けとり、「親身のご親切と深いご同情をお寄せ頂き、感動のあまり少なからぬ涙を注ぎました」と返事を書き送っています。

つて、新島襄が同志社のために流した涙です。1874年10月9日、アメリカン・ボード第65回年会がラットランドのグレース教会で開かれ、新島襄は海外伝道に旅立つ宣教師の一人としてスピーチをしました。デイヴィスはそのときのことをこう語っています。「この

若い日本人は熱情と誠実さをもつてキリスト教主義教育の偉大な祝福を語り、かすれた声とあふれる涙とをもって、日本国民がどのような暗闇の中にあつて何を欲しているかを描いてみせた。…彼はこう訴えたのである。『私はキリスト教主義の大学を建てる金なしには日本に帰ることが出来ません。それを得るまでこの演壇の前に立たせて頂きます。』

新島襄自身も、この壇上での涙について何回も書き記しています。「同志社英学校ノ如キハ元來我輩資金ヲ有シ之ヲ設立セシニアラス、一片ノ精神一滴ノ感涙克ク米国人ノ心ヲ動カシ其ノ賛成ヲ得其ノ寄附ニヨリ其ノ基ヲ立ツルニ至リシナリ」と「同志社大学設立之主意之骨案」に書かれています。「同志社大学校設立旨趣」では「一片ノ精神ト感激ノ涙」という表現が三回も使われています。「不覚数行の感涙を壇上に注ぎ」という表現も「同志社設立の始末」や「同志社英学校設立始末」に出ています。いずれにしても、感涙、そして感激の涙と、涙、涙です。新島の訴えに感動した、あの「老農夫」も「懐中ヨリ金二弗ヲ出シ黯然涙

ヲ垂テ」おり、あの「老婦」も泣きながら二ドルを差し出しました。このように、新島が壇上で感激の涙を流し、それに応えて流された多くの涙こそは、アメリカのキリスト者と新島襄の最初の愛の出会いの涙にほかならなかったのです。同志社はこの涙の出会いによって、多くの人々の愛と神の愛によって育まれ、やがて一年後に京都で誕生することができたのです。

同

同志誕生の後も、新島襄はたびたび涙を流しました。同志社のために、そして日本伝道のためにです。1879年12月27日、新島はアメリカン・ボードから同志社のために八千ドルが送られてきたことを知って喜び、ハーデーイ氏に宛てて感謝の手紙を書いているのですが、そこにも「嬉しさのあまり涙がほおをつたって流れました」とあります。感謝の涙です。

新島襄は、二度目に渡米した1884年10月、アメリカン・ボードに宛てて日本伝道促進に関する手紙と日本のキリスト教主義高等教育のためのアピールを書きました。その手紙の最後のところに

「私はこの紙片の上に心のありつたけと祈りとを流れるままに注ぎました。それだけでなく涙もまた注いだのです。」と書かれています。日本の伝道と教育のための熱情あふれる涙です。

新島襄はまた、同志社大学の設立のために涙をもって人びとに訴えています。たとえば1888年4月12日、京都知恩院で同志社大学設立のための寄付を訴えた演説草稿の最後のところには「襄数滴ノ涙ヲ以テ御計申ス所ナリ」と書かれています。また、同年10月、新島は大学設立募金のため関東に出かけるとき、学生をこの礼拝堂に集め、学生たちが大学設立のために毎月寄付をしていることに感謝し、「諸君、自分が倒れたら、屍を乗り越えて志を継いでほしい」と涙ながらに訴えたとき、当時学生だった牧野虎次（第十一代同志社総長）が語っています。

新島襄は、学生のためにも涙を流しています。1885年12月18日、同志社創立10周年記念会で、新島は自分が渡米している最中に退学になった数名の学生のことについて、「ほんとうに彼らのためには涙を流さずにはいられない。…諸君

よ、人ひとりは大切である。ひとりは大切である」と語っています。教育者としての愛の涙であり、迷える小羊を探し求める魂の羊飼いとての愛の涙です。

新島襄は晩年、長老派教会との教会合同を進めようとしている教え子の小崎弘道に宛てて、「実に呆れ果て」ている、「小生はただ天を仰ぎ、心中湧くがごとし 血涙潜々」と書き送っています。教会の自治・自由のための闘いの涙です。

ここに、いろいろな涙を流しました。涙を流しながらその生涯を歩んだ、まさに涙の人でありました。しかし新島は、単に涙もろかったから、涙を流しながら生涯を歩んだわけではありません。新島がいろいろなとき、いろいろな理由で流した涙をつきつめていけば、それはキリストの涙に連なる信仰と愛に基づく涙だったことがわかります。

新約聖書へブライイ人の手紙5章7節に、キリストは「肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、ご自分を死から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ

れた愛の涙によって、真の慰めと心の癒しを与えられていたのです。

また新島襄は、ある説教のなかで、「天の父は、われわれの頭の髪の毛の数を数えてくださり、またわれわれの涙の数をも数えてくださる」と語っています。この前半はマタイによる福音書10章30節の言葉ですが、新島はそれに付け加えて、神は私たちの流す涙をもしつかりと見て、私たちの涙の数を数えてくださっているのだというのです。新島がいかに神の愛に対してひたむきな信頼を抱いていたかがわかります。この神の愛への徹底的な信頼こそは、キリストの流された涙から新島が学び取った信頼にほかなりません。新島はこの信頼のゆえに、神に愛されているひとりとして、多くの人を愛し、同志社を愛し、そのために何度も手放して涙を流したのではないでしょうか。

先

日のことです。同志社のある先生が保護者の方から、あらぬ誤解を受けて苦しめられたのですが、それでも涙を流しながら頑張つて、なすべき教育をきちんと貫いておられること

敬う態度のゆえに聞き入れられた」と記されています。このキリストの涙は、何よりもまず神に対する徹底した信頼を表す涙です。

それだけではありません。この箇所ですぐ前には、涙を流しながら祈りと願いをささげた真の大祭司としてのキリストは、「自分自身も弱さを身にまとうているので、無知な人、迷っている人を思いやることができるのです」(5章2節)と書かれており、さらにその前には「この大祭司は、私たちの弱さを共に苦しむことのできない方ではない」(4章15節)と書かれています。これを踏まえ、キリストの流された涙は、私たち人間が弱さのゆえに、罪のゆえに、神への信頼を貰けない、そのような私たちの弱さを共に苦しんでおられる愛の涙にほかならないのだ、という意味が込められていることがわかります。このキリストの愛の涙こそは、「神がその独り子を世にお与えになつたほどに、世を愛された」(ヨハネによる福音書3章16節)という新島の愛唱聖句に示された神の愛をリアルに表すしるしなのです。

を、ふとした機会に知らされ、ひそかに感動の涙を流しました。また先日、あの4月の交通事故で亡くなった学生さんのお母さまをお訪ねしたとき、ひとり息子は同志社大学に入学して、あんなに喜ぶ息子を見たことがないほど喜んでいて、それなのに一ヶ月もたないうちに…と涙を流され、どうか同志社の学生さんに息子の分までしっかりと生きて、勉強して、頑張つてほしいと伝えてくださいと、多額の寄付をお申し出になられ、お母さまと悲しみの涙を共にいたしました。そのとき私は、同志社には互いに知ることのない、ひそかな涙が、あそこでも、ここでも、いろいろな理由で流されているであろうことに思い至り、はたして私はどれだけ神の前に、また人のために、同志社のために涙を流しているか、そしてまた、どれだけキリストの涙、新島襄の涙に思いを馳せているかを、深く反省させられました。

もし今、新島襄が、あるいはキリストが、私たちの現実を見たとして、いったいどのような涙を流し、いったい何を私たちに促されるでしょうか。もちろん、

新島襄は、キリストがゲッセマネで弟子たちに目を覚まして祈れと言われ、十字架上で自分を殺す者のために祈つて死なれたのは、「キリストが人の弱さを知り、思いやり、救おうとする厚情から出たことなのである。…ただただキリストは愛である。…キリストの思いやりを得ているならば、われわれもキリストの心

情がどのようであるかを思いやるべきである。…キリストほど思いやりの大きい、愛の大きい方はいない。だから、キリストほど友を得た方はいない。…全ヨーロッパ、アメリカ、アジア、アフリカから南太平洋に散在する小さな島々にいたるまで、キリストのために十字架を負い、キリストを慕つて涙を流さない者がいないのは何と驚くべきことであろうか。これはほかでもない、人間を創り給うた天の父の…あふれ出る愛と思いやりがキリストの身に顕れ、われわれの命を罪から救つてくださるからである。」と、ある説教のなかで語っています。新島は、涙を流しながら同志社のために、日本伝道のために、悪戦苦闘している真つただ中にあつても、ほかならぬキリストの流さ

促されたとしても、私たちの力はお応えするにはあまりにも弱い、そのことに変わりはありません。ですから、私たちは自分ひとりで孤独の涙を流しているとか思えないようなときがあります。しかし、キリストがそのような私たちの弱さをご自分に引き受け、共に苦しみ、涙を流しながら神に祈つてくださった、その涙によって清められているからこそ、そのことに気づこうが気づくまいが、私たちもまた、同志社に関わる涙を流す時と機会が与えられているのではないでしょうか。

同志社に関わる皆さま、どうかこの創立記念日を契機として、新島襄の流したさまざまな意味をもつ涙を私たちの心にしっかりと受け止め、新島の涙がキリストの流された涙とひとつにされていることを覚え、私たちもまた、新島襄の志を継承する使命を果たすために、私たち自身の涙をいろいろな機会に、率直に、そして大胆に流していこうではありませんか。

(2005年11月27日、創立130周年記念礼拝説教、同志社礼拝堂)

記念講演

新たななる改革に向けて

八田 英 二

大学長



小学校からの一貫教育によって同志社の良心教育を深める

本日は、同志社全体あるいは同志社大学が、どのような方向へ向かっているのかを京都の皆様の前でお話しさせていただきたいと思えます。大学職員や卒業生の前でお話しする機会がありますが、一般の方々の前でお話しするのは、実は初めてでございます。

最初の話題は、来年4月に開学する同志社小学校です。同志社の学校はすべて独立採算制ですが、同志社小学校は唯一、大学付属です。これは小学校の段階から

心豊かな生徒を育てたいという願いから、大学が小学校の教育に積極的に関与するもので、これも教育改革の一環とお考えください。新島襄は亡くなる前に、「小学校を作りたい」「初等教育の段階から同志社人を育て上げたい」という言葉を遺しました。2006年4月には、1年生90人と2、3年生各60人が入学します。校舎の設計は、京都大学工学部教授で建築家の高松伸氏。岩倉にある高校の所有地と大学の所有地とを交換して現在、建設中です。児童の創造性や自主性を育む非常にユニークなデザインになっています。制服は、同志社中学や高校と

同じようにありません。ランドセルの代わりに一澤帆布製のリュックサックを使い、給食は京都宝ヶ池プリンスホテルから取り寄せます。さぞ舌の肥えた小学生になることでしょう(笑)。

各大学、特に関関同立は、いま小学校からの教育に力を入れており、これも私立大学がめざす一つの方向ではないかと思えます。同志社中学校は2010年、岩倉に移転することになりました。そうなれば、同志社小学校に入學するとかなりの生徒が中学校、高校と12年間を岩倉で過ごすこととなります。同志社は12年間、どのような形で良心教育を、特に初

等教育、中等教育を行えばよいのか。ユニークな教育が実践できるのではないかと考えております。

社会的要請に応える学部作りと大学院重点化が生き残りの鍵

さて、少子化の影響は大学にも及び、私立大学が経営破綻した時のための破綻保険を文部科学省が策定する時代になりました。生き残るための競争は、本当に激しくなっています。たとえば京都大学も、もう昔の国立大学ではありません。国立大学独立行政法人になり、私立大学と同じような形でどんな他大学と競争しておられます。先日は、「京都大学アカデミックパートナーズ」というプログラムを発表されました。協賛金をいただいた企業に、このプログラムの呼称の使用権を与え、協賛金は大学の研究資金に使うということを考えておられます。加えて、今は株式会社も学校を運営できることになりました。一般的には競争が激しくなると価格が安くなります

が、学校の授業料はなかなか安くなりません。となれば、競争が激化すれば経営が立ち行かなくなる大学が出てくる。同志社大学は財務内容も良好で「AA+(ダブルAプラス)」という格付けを得ておりますが、実際に破綻した大学もある中で、どう生き残っていくのか。同志社は良心教育という、キリスト教主義に基づいたバランスのとれた教育をしています。この建学の精神を基礎にした教育理念を追い求める、これを離れて同志社の教育はないと考えております。

具体的には昨年、55年ぶりに大学に新しい学部を設置しました。それが政策学部です。ただ、このような少子化の時代ですから定員を増やすわけにはいかず、法学部・経済学部・商学部それぞれから定員を減らし、400名の定員を政策学部にて充てました。そして、工学部には情報システムデザイン学科と環境システム学科の2学科を新設。環境システム学科では、地球環境の研究と、同志社に由来なかった生体やバイオの研究を行います。

そのために、同志社は2年前に京都府立医科大学と学術交流協定を結び、府立医大の医師お2人を教授としてお迎えしました。新たな改革につながる一つの種と言えましょう。そして今春は、8番目の学部である文化情報学部を立ち上げ、同時に文学部の社会学科と文化学科教育学専攻を統合して社会学部としました。

結果、現在同志社には9学部と11の大学院がございます。同志社女子大学にも今春、薬学部ができました。薬学部の新設は従来なかなか認められなかったのですが、3年前から文部科学省の認可が下りるようになり、今は薬学部の新設がブームです。女子大学は、その前に現代こども学科という小学校教員の免許を取得できる学科も設置しています。

大学院に関しては、2004年二つの専門職大学院を新設しました。法科大学院と経営大学院です。今後、司法試験はロースクールを卒業していないと受験できません。同志社大学は司法試験も頑張っております。今年の論文式試験の合

格者が初めて50人の大台に乗りました。昨年は31人ですから、1年でかなり増えました。各大学とも、この種の資格試験がらみの合格者を増やしたいと考えておりますし、今後、大学4年間だけでは、特に文科系はなかなか高度な専門知識が身につかない時代になるでしょう。大学で学ぶことが、一つの時代の方向になっております。

二つの新しい大学院は、烏丸上立売の大学会館跡に建設した寒梅館という7階建ての校舎に入っています。寒梅館の名称は、新島襄の「真理は寒梅の如し。敢えて風雪を侵して開く」という言葉由来しております。この2〜5階にロースクールとビジネススクール、他にも学生の就職を支援するキャリアセンター、保健センターが入っております。6階は会議室で、7階はレストラン。京都の景色が大変きれいに見えます。着工前の発掘調査では、室町幕府の「花の御所」の築地塀の跡が出てまいりまして、発掘跡は保存しております。

医学関連研究センターで新たな理系学部を構築する

先ほど同志社中学校の移転計画にふれましたが、跡地は大学が使うことになっています。この1万8000平方メートルという広大な土地の利用法については、学内で大学将来構想委員会を設けて、現在いろいろと検討をしております。まだ決定はしておりませんが、一つの案として出ているのが、現在、京田辺で授業を受けている文科系の1・2年生の授業を今出川で実施したらどうかという構想です。京都市では建物の増築ができず、大学が市外へ流出していく一方でしたが、規制が緩和されて、現在は新たな建物が作れるようになっていきます。

もう一つは、これも決定していませんが、京田辺キャンパスに生命科学関係の学部を作るという構想がございます。残された分野で、同志社がまだ手をつけていないのがライフサイエンス。文部科学省は医学部、歯学部、獣医学部、それに

船舶職員いわゆる商船大学、この4学部は原則的に新たに設置させないと決めていますので、医学部は残念ながら今のところ新設できません。ただ、医師の養成はできませんが、医学部が行うような研究は十分できます。

先ほど申しましたように、環境システム学科には医師がいますし、同志社は府立医科大学との協定に基づき、バイオマーカー研究センター、再生医療研究センター、アンチエイジングリサーチセンターという3つの医学関連研究センターがあり、こちらにも医師の資格を持つ方がたくさんおられます。先日、NHKで「アンチエイジング最前線」という特集番組が放映されました。その時に出演していたお医者さんが、アンチエイジングリサーチセンターの米井嘉一教授です。また、来年精華町には学研都市病院という、約200床の病院が開設されます。同志社大学は過日この病院と協定を結び、所属されている医師は同志社大学の教育・研究にも従事し、学生も病院

で実習できることになりました。たとえは人工血液などの研究も、同志社大学としてこの病院で臨床実験ができることになるのです。もうすぐ学内に、4番目の医療センター「循環器病研究センター（仮称）」もできる予定です。このような土壌を基に生命科学部設置をめざし、今後、医学関連分野の研究を京田辺キャンパスで推進していきたいと考えております。

また、スポーツ科学など、スポーツ関連の学部に関する検討も始まりました。京田辺キャンパスには広大な土地に体育施設があり、保健体育の教員や医師もいます。こういう方々の経験と知識を活用すれば、可能なことでしょ。これらがうまくいきましたら、2010年頃までに同志社は11学部になっているかもしれません。今後は10年、15年、20年先をめざした改革を大学も女子大学も考えております。

地域の方々とともに進める改革

私は、大学は地域と離れては存在して

いけないと考えております。積極的に大学の門戸を地域の方々に開きたいと思いい、学長就任後は日曜日も門を開けることにしました。図書館は、日曜も17時まで開いております。今出川キャンパスの5つの重要文化財を紹介するキャンパス・ツアーも行っておりますし、授業も積極的に公開しております。同志社には自由な雰囲気があります。市民の方々には是非、キャンパスにお越しいただきたいと思えます。

新町キャンパスにも新しい建物がありました。臨光館という築70〜80年の古い校舎を建て替え、新・臨光館となりました。ここでは、主に社会学部と政策学部の授業が行われており、1階のレストラには一般の方にも開放しております。臨光館のすぐ南隣にあった体育施設も、5階建ての社会学部と政策学部の教員の研究室棟になっています。

同志社が改革を進めていくためには卒業生の方々と地域社会の方々のご意見を積極的に取り入れる必要があります。京

都の私学・同志社はこうあってほしいという声を届けていただければ、それを最大限生かしていきたい。地域の方々のご支援、ご協力あってこそその同志社です。皆様のご理解を得るためにも、同志社は積極的に情報を提供し、皆様のご意見を頂戴して、共存という形で生き残ってきたいと考えております。

新島は、同志社教育の完成には200年かかると言いました。130年が経ち、まだ、あと70年ございます。私の学長の任期は、あと1年5カ月ぐらいでございます。ここで何とか新しい改革の方向を定着させておくのが私の役目だと思っております。本日のような貴重な機会を与えていただき、また、たくさんの方々にお聴きいただいたことを光栄に感じ、感謝しております。同志社はこれからは創立200年に向けて、積極的に歩んでまいります。

(2005年10月29日「新島襄と同志社展」、大丸京都店6階多目的ホール)

記念講演

必要なことはただ一つ
— 女性教育への祈り —

森田 潤 司

女子大学長



同志社創立130周年記念をした京田辺チャペル・アワーでお話できることは光栄です。今日は「同志社と女性教育」についてお話ししようと思います。

マルタとマリアの話

聖書は神の前に人々が平等であることを読み取りますが、先ほどの聖書の箇所（ルカによる福音書10章38—42節）もその一つです。

あるとき、イエスの一行がベタニアの村にやってきました。マルタとマリアのいる家がイエスを迎え入れました。姉のマルタはイエスや弟子が集まってきた人たちをもてなそうと忙しく働きます。手

が足りないのです、その妹マリアの加勢を得ようとしたが、マリアはイエスの足もとに座って、その話に聞き入っていました。そこで、マルタはイエスのそばに近寄って言いました。「主よ、私の姉妹は私だけにもてなしをさせています。が、何ともお思ひになりませんか。手伝ってくださるようにおっしゃってください」。マルタの発した言葉に対して、主は答えになりました。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない」。

マルタはイエスの一行をもてなすことに心を砕くやさしい女性です。マルタは、

して、このマルタとマリアの話を読むと、いろいろなことを感じさせられます。イエスにとって、女性も男性も、神の子でもあることに変わりはありません。ですから、イエスはマリアもマルタも軽々しく扱っていません。イエスは、足もとに座っていたマリアにわかりやすく教えを説いていたことでしょうし、マルタの訴えに対しても「マルタ、マルタ」と丁寧と呼びかけ、「女性が神の言葉を聞いてよいのですよ。いや、それこそが全ての人にとって一番必要で大切なことですよ」と教えています。「必要なことはただ一つである」。それはイエスの話に聞き入っていたマリアにとって喜ばしく勇気づけられる言葉だったでしょう。同時に、男女の役割分担の固定概念に縛られていたマルタにとっても、目から鱗が落ちたような言葉だったことでしょう。

新島は聖書のこの箇所を、「永く私に人間にとつて、無くてならぬものを知らせてくださったお言葉であり、聖書の中に一個の恒星の如く輝く箇所である」としています。

学がどういふことか

この話はイエスが「信心と愛の実行」

のどちらを優先するかを教えられた箇所だとされていますが、もう少し広く、女性への学問の奨励であると解釈してはどうでしょうか。もちろん「ただ一つの必要なこと」とは、神の教えを聞くことであり、信仰です。しかし、イエスの時代、信仰の話を聞くことは、実は、その時代の最先端・最新の学問の話を聞くことでした。マリアは神の言葉とともに社会のできごと、知恵や哲学など様々な話を聞いたことでしょう。それは学問そのものです。イエスは男性聴衆の中で、女性への信仰と学問を奨励されたのです。同志社の女性教育も、こうしたキリスト教の精神に基づくものです。

同志社での女性教育
— 祈りの結集 —

同志社での女性教育が同志社英学校創立直後から始まったことは、全て神の御技といわざるをえません。

新島は、アメリカでの体験や西欧での見聞を踏まえ、女性教育の意義と重要性を理解していました。たとえば、次のように述べています。「家を建てるのに土台が必要のように、国の場合にも基礎をしっかりと据えるならば、自由が得られ

食事や飲み物を準備したり身の回りの世話をすることが、主へ仕えることと信じていたのでしょうか。しかし、忙しさのあまり妹に不満を抱き、自分を正当化し、イエスに訴えたのです。マルタの言葉は、マルタの口を通じた当時の男性たちからマリアへの非難の言葉でもあったのでしよう。当時、神を礼拝するのも、神の言葉や律法を学び守るのも、男性の務めでした。その男性に仕えることが女性の務めとされてきました。男性が神に奉仕し、女性はその男性に奉仕する。それを「男女の役割分担」と言うとき聞こえがよいかも知れませんが、女性の役割は全く従属的なものでしかなかったことにならないでしょうか。そういう時代背景を前提と

文明も期待できるのです。それでは、文明の基はどうしたら立てることができのでしょうか。まず神を知ることです。神を敬うことは知の第一歩なのです。（中略）次に日本に文明の基を築く第二の道を考えてみたいと思います。それは日本人を改良すること、すなわち人心改良をすることです。それにはなんといつても教育が重要です。（中略）すなわち、脅えることなく自由の心を持ち、見識と愛情を持った女性が育つていないところ。にこの国の深刻な問題があることです。教育、なかでも女性が抑圧されてきたこの国では女子教育を充実させることが必要です」（現代語で読む新島襄「149・150頁」）。女性の社会での活躍は新島の切なる祈りでした。

残念ながら、帰国したばかりの新島にとつて、キリスト教の学校の創立が焦眉の問題であり、女性教育は優先的問題ではありませんでした。にも関わらず、同志社英学校創立直後に女性教育が始められたのは、新島に協力し同志社の創立に関わった人たちの女性教育への深い理解があったからです。

まず、山本覚馬です。山本は、戊辰戦争で捕らえられ薩摩藩邸に幽閉中、新時

代を迎える日本がとるべき施策を挙げた『管見』を口述筆記させ薩摩藩主に提出しています。この中で学校・女学を挙げ、「日本支那ハ婦人ニ学問ヲ教ヘズ、自今以後男子ト同ジク学バズベシ。(中略)夫女ハ生質沈密ノ者ナレバ其性ニカナフ學術団体ニ関ハル者ヲ撰ビ教ユベシ、且才女ハ猶ホ学バズベシ」と述べています。山本が「才女ハ猶ホ学バズベシ」と女性高等教育の必要性をも強調し、女性の特性を活かした学術社会活動を奨励している点は注目してよいでしょう。山本は京都府立新英学校女紅場の設立に関わっています。キリスト教の教えと出会ってさらに女性教育へ意を強くし、女性のためのクリスチャンスクールを京都に作りたいとJ・D・デイヴィスに伝えています。

デイヴィスは、新島の男子学校設立に協力するために京都に来ていました。彼は熱心な女性教育推進論者であり、神戸で現在の神戸女学院の前身神戸ホームを支援した経験をもっており、同様のガールズ・スクールを大阪や京都で作ろうとしていました。そして、山本の話聞き、女性学校の設立を新島に勧め、積極的に計画を進めていきます。

新島も、山本も、デイヴィスもイエ

ス・キリストの教えに従い、必要なことはただ一つとして、女性に信仰と学問を奨励しようとしていました。そんな3人が見えざる手によって集められ、3人の女性教育への祈りが結集され、同志社で女性教育が始められようとしていました。

加えて、新島夫人八重とアメリカ人女性宣教師の役割も重要でした。八重は山本寛馬の妹で、京都府の新英学校女紅場に舎監兼教員として勤めていました。八重は兄寛馬の紹介で新島と1875(明治8)年10月15日に婚姻。直後にクリスチャンと婚姻としたということで、新英学校女紅場を解雇されています。翌年正月2日、デイヴィスにより日本最初のプロテスタントとしての洗礼を受け、翌3日新島と結婚します。八重は結婚直後から自宅(新島邸)で塾を開きます。教師は八重とE・T・ドーン夫人(デイヴィス夫人の姉)でした。残念ながらこの塾は、生徒が辞めてしまつて自然消滅します。

女子塾そして同志社女学校

4月になり、デイヴィスの要請を受けたアメリカンボードから女性宣教師のA・J・スタークウエザーが派遣され、

京都御苑内のデイヴィス宅(旧柳原前光邸)で女子塾を開設します。同志社女子大学および同志社女子中等高等学校のルーツです。記録では10月24日開設となっていますが、スタークウエザー来日直後から塾を始めていたと考えてもよいでしょう。女性への教育が、同志社英学校開設のほんの数ヵ月後には始まつたことになりました。

翌年4月、新島を校長として同志社分校女紅場が開設されます。同志社分校女紅場には府勸業課からクレームがつき、同志社女学校と改称する届け出を出し、9月に認可されます。ここから同志社女学校が、教科や授業を含めて全寮制普通学校をめざしていたことがわかります。八重は府立女紅場での経験を活かして教員として関わり、母さくも舎監として関わっています。

女学校の運営は、新島が多忙のため、実質上デイヴィスやアメリカ人女性宣教師に任されていたようです。そのためか、同志社女学校では運営や教育方針をめぐって意見の衝突もありました。たとえば、洗礼を受けたとはいえ、恐らく古き土族の考えを引つ張っていた日本の自立した女性八重やその母さくと、使命感に燃え

るアメリカ人女性宣教師との衝突。また、女性宣教師を校長とする宣教師たちとこれに反対する日本人教師たち(理事)の意見の相違などです。こうしたトラブルにも関わらず、同志社の女性教育は確実に実を結んでいきます。創設当初の女学校生徒学生たちの話からは、アメリカ人女性宣教師たちの教育方針に反発しながらも音楽・西洋料理・体操など西欧の学問をむさぼるように学んだ姿が浮かびあがってきます。

今、女性教育は？

今はどうでしょう。女性の大学進学率も上がり、多くの女性が当然のように高等教育を受けるようになりました。新島が願ったように女性が「文明の基」となってきたといえましょう。しかしながら、マルタにかかつていたような暗黙のプレッシャーを感じている女性は、今でも多いのではないのでしょうか。ことさらジェンダーを強調するつもりはありませんが、女性が学問や仕事をすることはまだまだ大変です。

今日本では、女子大学の共学化が進んでいます。形ばかり共学にしても本当の意味の平等の世界は来ないように思う

のです。また、つい忘れがちですが、共学大学には多数の女性が学んでいます。彼女たちをどう育てていくのか、女性教育は共学の大学にとっても重要な課題でしょう。

同志社教育の多様性

同志社は、早い時期から男性にも女性にも学ぶ場を用意しました。同志社英学校では、男女が共に学ぶことも認められていました。今も学校法人同志社は中学校・高等学校・大学の各教育課程で共学と別学を併存させています。慶應義塾や早稲田にないものです。同志社は、神の前の平等と多様性を説くキリスト教の精神に基づき、文明の基とするため、女性に対する多様な教育機会を用意しているといつてよいでしょう。同志社が、創立者たちの女性教育への祈りに応え、女性教育に携わった人物を輩出していることも強調したいことです。

最近、医薬の種類や投与法について、男女それぞれに適したものがあつて、詳しい研究が始まっています。教育についても、どうすれば男女の特性を活かし伸ばすことができるのか、さらに考える必要があります。ここで、別学の方

が共学より優れた教育システムであるといつてもいいかもしれませんが、共学が別学より進んだシステムである、あるいは優れたシステムであるとすると証拠もありません。女性に限らず、人の特性・個性は様々ですから、一人ひとりの特性・個性を伸ばすための多様な教育システムが必要でしょう。

今、「必要なただ一つのこと」は何か

女性も男性も、誰もが大切にされる世の中の実現が望まれます。聖書は私たちに、神の前では誰もが平等であり、私たちが互いに愛しい他人を大切にしようにと教えています。誰もが自由で平等に扱われ大切にされる社会を実現させるため、今、「必要なただ一つのこと」は何か、私たち一人ひとりが同志社創立130周年の時に当たつて考えたいものです。

(2005年11月30日、「京田辺チャペル・アワー」創立記念礼拝における奨励抄録)

新世紀の後輩たちに 伝える新島襄讃歌

—創立130周年記念

新作能

ていしよおのんめ

「庭上梅」を初演



新島の理想と志を21世紀に呼び覚ます意欲作

2005年11月26日、新島襄を主人公にした新作能「庭上梅」が、寒梅館ハーティールにて初上演されました。同志社創立130周年記念行事の一環として上演されたもので、企画・制作は、同志社大学能楽部観世会の卒業生で構成する同志社紫謡会の皆さん。舞台では、79年に同志社大学文学部を卒業して以来、能楽部の指導を務めている観世流シテ方の井上裕久さんが主人公新島を、間狂言では新島に終生仕えた松本五平を大蔵流狂言師の木村正雄さんが務め、能楽部のOB1人と学生3人も地謡方として参加。当日は約900の客席が満員となり、終演後は感動に満ちた盛大な拍手が送られました。

「庭上梅」は、大磯の旅館百足屋で療養中の新島襄が見舞いに訪れた学生に、建学当初の苦労話や同志社の発展を願う思いを語るというストーリーです。前半は有名な「自責の杖」の話や、「庭上の一寒梅 笑うて風雪を侵して開く 争わず又力めず 自ら占む百花の魁」という、今回の作品の基となった新島の詩などが登場。後半は、床の中でまどろむ学生の夢に21世紀の「良心の全身に充滿したる」若人たちが現れ、同志社マークの入った金地扇を手に、新島から脈々と受け継がれた同志社精神を高らかに謳い上げて終わります。新島の能面はそのリアルさで客席をどよめかせ、また後半の謡には今出川校地の校舎名が織り込まれるなど、卒業生にとっては母校の存在が改めて身近に感じられた1時間の作品でした。

「8年がかりの一大記念事業、 時間をかけて能楽部伝統の作品に育てたい」

—井上裕久さんに聞く

この作品の節付けや型付けをされ、舞台上で新島を演じられた井上さんに、初演に至るまでのお話を伺いました。

——「庭上梅」の企画が生まれた経緯をお聞かせください。

井上 紫謡会70周年の打ち上げの席で、「21世紀の到来と創部80周年に向けて、

能楽部として後輩たちに残せるものを何か作ろう」というお話を私からさせていだいたのが発端でした。その段階ではこのような新作能を作ることになるとは思っていなかったのですが、私の話を心に留めてくださったOBの方がおられまして、2年ほど経ってから80周年記念事業の企画が本格化していった次第です。

テーマは同志社精神。となれば、新島襄。新島の人となりや考えをアピールする能を作ろう、表現方法は後から考えればいい、というふうに模索しながらどんな話がふくらみました。そのうえ最初は能楽部だけ

の企画だったのが、創部80周年と同志社創立130周年が重なることもあって130周年記念事業と関わるようになり、ましてや新作能をつくるなど雲をつかむような話ですので、当初は「えらいことを言うたなあ」というのが私の正直な気持ちだったと思います。

——制作はどのような手順で進められたのですか。

井上 原案は紫謡会と私とで考え、台本は能楽部顧問をしていただいた文学部名誉教授の加美宏先生にお願いし、それを私が改めて能仕立てにしました。そして台本の制作が本格化する段階で、新島を主人公とする新作能制作の了解も同志社からいただきました。



井上裕久 (いのうえ ひろひさ)

1979年大学文学部美学及び芸術学専攻卒業。国指定重要無形文化財「能楽」認定者。社団法人京都観世会理事。79年4月より大学能楽部観世会を指導。

最初が能楽部だけ

最初に節をつけて完成したのは「庭上の一寒梅」。寒いところから花が咲くという寒梅の姿によって、新島の思いを最も伝えられたと思ったからです。この作品は新島讃歌ではありませんが、新島をいたずらに偶像化することなく、できるだけ人間性豊かに描くことが目的でした。そして晩年を描きながらも、死そのものは表現しない。そして4〜5年で最初の台本ができ上がり、手直しをして完成したのが今回使った第2版です。



同志社のマークの入った金地扇を手に演じられた終盤の場面

——物語をつくる過程でも、ご苦労が多かったと思います。

井上 能では神様や仏様、花の精など、実際には目に見えないものもよく演じられますが、観客は役者の演技そのものを受け取るだけではありません。能は観客が自分の中でイメージをふくらませることによってつくり上げる芸能で、そこに面白さがあります。

ただ今回は、キリスト教の神を偶像化して舞台に出すことはできないという条件がありましたので、新島が神様に導かれていった過程をどう表現するかというところで苦労しました。最初は脱国の船出にシテである神様が現れて、ワキとな

る新島の未来を勵まし導くという筋を考えたのですが、それができなかつた。それで一からやり直して新島の回想シーンを中心にすることにしました。しかし回想シーンだけで明治時代の話で終わってしまいますし、それは新島の死の話になる。それではめでたくない。そこで新島の偉業が長いときを経て現代に花開いたことを、夢に現れた学生に語ることにしたので。OBの方々がたびたび話し合いを持たれて元のストーリーが固まるまで、おそらく1年くらいかかったのではないのでしょうか。皆さん、同志社に対する思いが強いですから、さまざまご意見が飛び交ったとうかがっています。

井上 病床にあるが、けつして心は萎えていない。そういう強い意志を持った新

島を演じようと思っていました。心の動きが重要になりますので、見た目以上に新島の「思い」というものを表現することが必要でした。内部から訴えるものの方が、ご覧になる方の心に後からじわつと染み渡るのではないのでしょうか。演じ終わって皆さんの拍手を耳にし、何らかの満足をしていただけたかな、と思っています。

新島先生は、非常に自然な感じで私の中に存在しています。上演の翌日が創立記念日だったので、報告とお礼を兼ねて、妻とともに若王子の共同墓地へお墓参りをしてまいりました。

——今後もこの作品を上演する機会が増えるといいですね。

井上 そうですね。どんどん上演して、この作品を育てていきたいですね。もう少し短くして、上演しやすいパターンも作っておこうかと考えています。上演には囃子方や地謡方など大勢の人が必要です。今あまり頻繁にはできないと思いますが、今後も同志社の行事などで演じさせていただく機会があればありがたいと思います。

(2006年2月20日、寒梅館。巻頭グラビアを参照)

このたび同志社創立130年記念事業の一環として、『新島襄の手紙』(同志社編)が岩波文庫から刊行された。本書は、1954年に出版され広く親しまれてきた旧版『新島襄書簡集』の編集方針を見直して、内容を一新し、最新の新島研究の成果を加えた「新版」である。文語体を読むことに慣れていない現代の若者にも、読みやすいような工夫が随所に施されていると同時に、新島自身が使った独特の風格を持つ文体を残す努力もされている。その意味で、本書は、『新島襄全集』と『現代語で読む新島襄』とを結び位置にあるといえるであろう。同志社創立130年に当って、この本が新島研究と同志社教育にとつての新たな「必讀書」の一冊として加えられたことを、心から喜ばしく思う。

本書では、『新島襄全集』を定本として全部で96通の手紙が採用されているが、うち新規に採録された手紙は56通、旧版と重複しているものは40通となっている。新島がアメリカの友人らに送った英文の手紙が読みやすい現代語に訳されて22通収録されていること

『新島襄の手紙』を 岩波文庫から刊行

才藤 千津子
新島学園短期大学助教授



も、本書の新しい魅力の一つといえるだろう。

しかし、旧版と比べた際の本書の何よりも大きい特徴は、「書簡の人」といわれる新島襄の人間味あふれる等身大の実像を、彼の手紙を通して浮き彫りにしようとしていることである。旧版にみられた、いわゆる「新島先生らしくない」箇所を作為的に排除することは今回改められた。人間的な悩みも抱えていた新島が書いた手紙のありのままの原文を掲載することによって、現代に生きる若者にとつて、より親しみやすい人間新島の姿が伝わってくる。

本書の編集に当たられたのは、大谷實(同志社総長)、北垣宗治(大学名誉教授)、伊藤彌彦(法学部教授)、本井康博(神学部教授)の先生方である。これらの編集委員会のメンバーは、各自分担で仕事を進めたあと、最終的には全員合議の上ですべてのテキストを審議、確定したと記されている。これら編集委員の方々の革新的な編集方針と地道なご努力に、深く敬意を表したいと思う。

ニューイングランドに同志社の ルーツを訪ねて

—創立130周年記念「新島メモリアルウォーク」—

桂 良彦
 大学生支援センター
 京田辺校地学生支援課
 課長

校祖の足跡をたどる旅

2005年に130周年を迎えた同志社。大学生支援センターでは、これを機に同志社のルーツであるニューイングランドを訪ね、現地で建学の精神を今一度見つめ直し、同志社のアイデンティティーを確認する『新島メモリアルウォーク』を9月に行った。

米国のバーモント州ラットランドを基点に、「マサチューセッツ州アーモストまで、同志社の歴史の現在を担う学生・教職員らが、同志社創立の礎ともいべき「農夫の二ドル」の寄付に想いをいたし、「歩く」という行為を通じて彼の地の「良心」の人々に感謝の念をささげよう

とする試みである。

このプロジェクトは、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に採択された本学学生支援のテーマ『大学コミュニケーションの創造—コミュニケーション・デバインドの克服—』の一環として実施。同志社人としての帰属意識の体感を通して、学生と教職員、同志社・アーモスト両大学生、プロジェクト参加者と校友などのデバインド（分け隔てる壁）を克服しようとの想いも込められている。

踏破隊は学生15名、学生支援センター職員3名にカメラマン。ウォーク期間中は、学生支援センター・キリスト教文化センター両所長が最寄り的一般道を並走

移動し、アパラチア山脈に行く踏破隊と衛星電話で連絡を取り合うなどしてサポート、危機管理に備えた。

幸いにも、5月に募集を締め切った段階で58名の応募を得て、6月下旬には苦渋の末に参加学生を決定。選定ルートを全員で歩き切るための練習ウォークは、今出川キャンパスから近鉄奈良駅までの45kmをはじめとして、8月炎天下の京田辺、熊野強化合宿を含めると、延べ約30日、1,000kmに及んだ。

そして、9月2日には学長、国際センター所長らの参列を得て、壮行会を兼ねた結団式を行い、到着地アーモスト大学での再会を約した。

身震いしたグレース教会

9月10日、いよいよプロジェクト一行はボストンに向け出発。翌日、ラットランドに移動し、12日のグレース教会での記念式典に臨んだ。1874年10月9日、新島が第65回アメリカンボード年会において、日本に派遣される新人宣教師としてスピーチをした場所である。荘厳な雰囲気の中、記念式典では鈴木直人キリスト教文化センター所長から「このグレース教会での演説は、新島の志が『教育』にあることをはじめに公にした同志社の出発点といえるべきもの。この集会で一人の農夫は帰りの汽車賃の二ドルを、一人の寡婦は所持金の二ドルすべてを、日本の将来のために捧げた。このメモリアルウォークが同志社にとって、また参加した者にとって、新たな出発点の一步となるようお導きください」と祈祷ならびに記念講演。グレース教会からの歓迎の辞の後、百合野正博学生支援センター所長から、「新島襄という一人の人間がここでスピーチをしたから、こうして大学となり卒業生もいる。ウォークの5日間を通して同志社で学ぶ意義を考え、諸君た

ちが新たな新島襄として、自分の良心に従い外に向かつて様々に活動することを期待する」とこの取り組みの趣旨を説明した。ついで、校祖新島が立ったまさにその演壇で、参加学生一人ひとりから、「新島先生も131年前にこの景色を見たのかと思うと身震いする。それだけこは力のある場所です」「いろんな人のお陰で、いよいよここまで来た。この半年間を思い返して、感謝の想いを込めて歩きたい」「幕末の時期に命をかけて新島先生は脱国を成功させこの地にたどり着いた。この地でどんな人と出会って、どんな決心をしたかウォークを通じて考えてみたい」等々、ウォークに臨む決意が順次述べられた。

いざ、ウォーク

式典が終わるとすぐにウォーク開始地点に移動。7月初旬までは一般道を毎日40km程度に距離を伸ばして歩くことを前提に、候補ルートも策定していた。しかし最後に大型車両を配置し、総勢20名におよぶ人間が場所により路肩がない一般道を歩くことは、その後法的な問題が払拭できない事情も判明し、やむなく断

念。最終的にはカナダから途中ラットランド市街地のすぐ東側を通り、アメリカ東部の尾根伝いを約3,500kmに渡って南北に縦断するアパラチアントレイルの縦走南下を決定。以降安全確保を第一に、同山域に精通した専門ガイド確保やルート情報収集等に奔走する。パーティーとしては異例の総勢20名ではあったが、初日の10km弱のトレイルを難なく終了した。

ウォーク2日目（13日）からは、14・5km、22・6km、20・0kmと距離を伸ばしてトレッキング。幸いルートは「撮つていいのは写真だけ、残していいのは足跡だけ」のルールも遵守され、思いのほか整備されていた。途中、ピークや湖などビューポイントにたどり着くたびに歓声が上ががる。緑濃いルートは心が洗われる。もみの木の群生も。3日目には真新しいムース（ヘラジカ）のビー玉大の排泄物がルート脇に。翌日にはその生息地域ということで、サイレントウォークを敢行した。ルートにもよるが1時間2マイル（3・2km）が目安とされるアップダウンを、無事こなすことができた。2日目のウォーク終了後には、アーモスト

2005年は創立130周年を記念して、原点たる新島精神への認識を新たに、学内外へ啓蒙を図る行事が開催された。ラットランドからボストンまで歩く「新島メモリアルウォーク」、新島ゆかりの地での講演会・展示会等の法人行事とは別に、アメリカでの「新島裏の足跡をたどる旅」が8月に企画され、同志社関係者32人が参加した。本書はこの旅の貴重な指南書となった。

本書は、1865年7月、新島が乗船したワイルド・ローヴァー号のボストン到着から、1874年11月、アメリカン・ボード准宣教師として帰国するまでを中心に、その後や周辺の経緯を64頁にまとめられている。新島のアメリカでの生活と勉学のすべてを息子のように支援したハーディ夫妻、兄となって新島を支えたテイラー船長、新島の篤い信仰心に触れ、感動を持って遇した下宿先のヒドゥン女史、同じ下宿で勉学や聖書を教えてくれたプリント夫妻、フィリップス・アカデミーのテイラー校長、アーモス

『ニュー・イングランドにおける新島裏ゆかりの場所』を刊行

井上勝也・北垣宗治 共編



(学校法人同志社発行)

ト大学のシーリー教授等、新島の真摯な求道の姿勢と行動によって、見も知らぬ異国の人々が心を動かされ、アメリカでの父母となり兄弟となつて、新島に対する手厚い支援の手が差し伸べられていく様子が生き生きと描かれている。

本書を教材に、編者の一人である北垣氏の講義を受けながら現地を周る「新島の足跡をたどる旅」は、今まさにその建物から新島やハーディが現れそうな錯覚さえ感じる、不思議な実感を伴う旅となつた。コンパクトな本書ではあるが、読み返すたびに感動が新たに、新島のひたむきな行動と、それを支えたアメリカの人々の信仰に裏付けられた大きな懐に胸が熱くなる。同志社に学ぶ学生や教職員が、本書を携えて新島の足跡をたどり、その地に立つて新島の息吹を肌で感じていただきたいと念願してやまない。

大学学術情報課長

落合 万里子



ジョンソンチャペル記念式典での八田学長挨拶

アーモスト大学での歓待

約80kmを踏破した一行が大学に到着する頃には、すでにジョンソンチャペルの記念式典の開始時間が過ぎていた。緊張の面持ちで会場入りする我々を待ち受けていたのは、両大学学長らをはじめとする百名におよぼんとする会衆の拍手。あわてて、メモリアルウォークの旗を掲げ、正面中央に着席する。ほどなくマルクス・アーモスト大学学長の歓迎の辞に始まり、八田英二学長、沖田行司国際センター所長の挨拶が続く。学生リーダー松本亮太君（政策・2年）のお礼のスピーチについて、新島先生の肖像画が見守る中、壇上でカレッジソングと同志社チアを披露。その後、八田学長よりマルクス学長に記念品贈呈を行い式は無事終了。ほどなく場所を移して行われたレセプションでは、お土産話に花が咲いた。

翌17日は、午後から2班に別れアーモスト大学生によるキャンパスツアー。ついで、渡米前から準備を重ねた両大学学生の交流会。日本文化の紹介などの後、練習を重ねた新島メモリアルウォーク・オリジナル曲（ウォーク参加学生の手

詞・作曲）の『A Long Trail Way』を全員で披露。次第に気持ちは打ち解けて、会の後も寮やアーモストの町に繰り出して行った。

今後に向けて

その後、ボストンを経て21日に帰国。アーモスト大学の全面的な協力の下、実際に足を運ぶことの圧倒的な説得力を痛感しつつ、同志社の原点を追体験する「新島メモリアルウォーク」は幕を閉じた。去る11月の同志社EVEでは、ウォーク参加学生による映像や写真などを通じた報告会も開催された。現地からの日々の報告や参加学生の体験記など、今回の取り組みを大学HP (<http://www.doshisha.ac.jp/students/support/kaprog/memorial/>) に掲載しているの、是非覗いていただきたい。今後も、参加学生を始めこのプロジェクトに加わった皆がこの経験を語り継がねばとの想いでいる。

最後に語学研修を軸とした「アーモストサマープログラム」に終止符が打たれて7年余り。新たな形でのアーモスト大学との学生交流の進展を願わずにはられない。

各地で創立130周年記念行事を開催

―「新島襄と同志社」展・講演会の報告

小枝 弘和

同志社史資料センター
社史資料調査員

開催に向けて

同志社は1875年の同志社英学校開校から2005年で130周年を迎えた。この記念すべき年に、創立者新島襄や同志社とゆかりのある土地を中心に、全国7カ所で講演会と展示会を実施した。講演会の講師は新島研究に携わる研究者が担当し、展示会は同志社史資料センターが企画、準備、実施などを担当。企画の段階で提示された大きなテーマ―「新島襄の生涯と同志社英学校から現在の同志社までを展示で紹介する」―を写真パネル全体の構成とし、ここに講演会の開催地と同志社の関係を表すパネルや資料を組み合わせて、各会場それぞれ

独自の展示会を企画した。展示会のメイン・コンセプトは、新島から継承してきた同志社の建学の精神を広く周知してもらうことで、先進的並びに普遍的ともいえる新島の教育思想を伝え、同志社建学の理念をより深く理解してもらえるような展示を目指した。

各地での「新島襄と同志社」展講演会

1・札幌市（2005年6月19・20日）

最初に講演会が開かれたのは北海道の札幌である。北海道で思い起こされることは函館における新島と福士成豊（卯之吉）との関係であろう。福士は新島が函館から密出国する際に、用意周到に新島

を助けた。両者の交友は一時断絶するが、新島の帰国後に復活し、1887年に新島は2カ月ほど札幌の福士宅に寄寓している。また札幌とのつながり言えば、新島を「私の最初の日本人生徒」と言う、草創期の札幌農学校教頭を約8ヶ月間務めたW・S・クラークであろう。さらに、札幌農学校出身の大島正健や有島武郎なども明治期、大正期に同志社で教えている。このような関係者に関係する写真パネルや資料も組み込んで展示会を行った。

講演会の開催場所はJR札幌駅地下街アピライラックホールで、展示会の来場者は約140人であった。講師の伊藤

彌彦教授（同志社社史資料センター所長、大学法学部）は19日「新島襄と徳富蘇峰」、20日「新島襄と徳富蘆花」というテーマで講演し、両日で約50人が参加した。

ラリーホールで、約160人が訪れた。太田教授は23日「新島襄と東華学校」、24日「新島襄・柏木義円と吉野作造」というテーマで講演し、両日で約110人が参加した。

2・仙台市（2005年7月23・24日）

2番目の開催地は宮城県の仙台である。同志社と仙台の関係ですぐに連想されるものは、「東北の同志社分校」と言われた東華学校であろう。この後身にあたる宮城県第二女子高等学校から、今回の講師である太田雅夫教授（元桃山学院大学教育研究所教授）のご尽力で、同校から東華会（東華学校の学生を中心とした文芸会）発行の『東華』第1号と第2号をお借りすることが出来た。さらに、太田教授は同じ宮城県出身で同志社とゆかりのある吉野作造に関係する貴重な資料を提供された。吉野はかつて同志社大学の教壇に立ったこともあり、恩師の海老名正総長辞任後の総長人事にバックアップした。また、一時期学長候補に名が挙げられたこともある。これらの資料をくわえて、展示会は充実したものとなった。



熊本会場の展示風景

3・熊本市（2005年10月1・2日）同志社と最もゆかりのある土地として認識されている場所は熊本であろう。草創期、氣息奄々としていた同志社英学校が体裁を整えることが出来たのは、熊本洋学校廃校後に大挙して押し寄せてきた「熊本バンド」の人々の入学があったからである。彼らはのちに、宗教界、教育

界、政財界、官界、社会福祉の分野などで秀でた活躍する秀才ぞろいであった。熊本講演会での展示では、同志社が所蔵する「熊本バンド」の人々の写真パネルや書簡、遺品等を用いて「熊本バンド」コーナーを設置し、同志社と熊本のゆかりの深さを表現した。

4・京都市（2005年10月27日、11月1日）

全国7カ所をめぐる講演会の折り返し地点は、同志社の地元、京都であった。講演会場となった大丸京都店6階多目的ホールは、距離的な利便性や会場の規模の大きさも手伝って、これまで展示してきた写真パネルや資料に、かなりの数の新島遺品庫収蔵資料を加え、また、地元開催ということで同志社内の諸学校から協力を得て各学校の写真パネルや、さらに新島会館が所蔵する新島襄、新島八重、山本寛馬、ハーディー夫妻、シーリー学長の肖像画など、展示品の総数160点以上となった。大谷 實総長、野本真也

界、政財界、官界、社会福祉の分野などで秀でた活躍する秀才ぞろいであった。熊本講演会での展示では、同志社が所蔵する「熊本バンド」の人々の写真パネルや書簡、遺品等を用いて「熊本バンド」コーナーを設置し、同志社と熊本のゆかりの深さを表現した。



京都会場でのテープカット。左から、森田女子大学長、野本理事長、大谷総長、八田大学長

理事長、八田英二大学長、森田潤司女子大学長のテープカットで始まった講演会は、来場者総数約7000人という大規模な企画展となった。

また、10月29日には八田英二大学長が「新たな改革に向けて」、30日野本真也理事長が「新島襄の志」というテーマで講演し、両日で約3000人が参加した。

5・名古屋市（2005年11月12・13日）

名古屋講演会では、新島と同志社を具体的に理解できるようなわかりやすい展示を心がけた。なかでも名古屋講演会の特徴は、同志社のシンボルでもある同志社徽章やカレッジ・ソングに関する資料を展示したことである。これらの資料を通じて、校友には往時を振り返ってもらえるように、また一般の来場客には同志社の教育や伝統を感じてもらえるように配慮した。

講演会場は、ナディアパーク3階デザインホールで、約280人が参加した。講師は、井上勝也教授（大学名誉教授）で、12日は「新島襄と森有礼―彼らは明治国家の近代化をどのようにして実現しようとしたか―」、13日は「同志社に学

び教えて50年―私と新島襄―」のテーマで講演され、両日で約1500人が参加した。

6・安中市（2005年11月19・20日）

群馬県安中といえは新島の故郷である。会場は、1878年新島が安中で創設した安中教会となった。おりしも、安中教会は2004年11月に安中教会教会堂（新島襄記念会堂）をはじめ4つの建物が国登録有形文化財に指定されたばかりで、今回の講演会は同志社創立130周年とともに安中教会の文化財指定1周年を記念するものとなった。

展示会場は安中教会の教育館で、新島の生涯を一覧できる写真パネルの展示を中心に、「自責の杖」や新島が愛用した聖書などを展示した。また、安中といえは、新島の強力な支援者であり、初期の同志社経営に尽力した湯浅治郎の出身地である。この関係で、彼の弟・吉郎（半月）が残した同志社徽章に関するメモなども展示した。両日で約330人が来場した。

講演は、安中教会教会堂（新島襄記念会堂）で行われ、本井康博教授（大学神

同志社と地域との深いつながり 各地の講演会を終えて

私は展示の準備や実施の担当者として全講演会場をまわり、各地の方々との交流を持つことができた。どの会場においても多くの人々のご協力を受け、同志社と各地域との深いつながりを感じることができた。

展示に関しては、多くの来場者からご意見、ご感想をいただいた。なかでも、新島の教育に対する姿勢や人柄を示す資料や、生活用品や衣類などに対する反響は大きかった。また、新島や同志社と各地の名士の交遊を示す資料に対して興味を示される方も多かった。そのほか、多くの研究者と出会い、情報を交換できたことは当センターにとって今後の資料調査等に大いに役立つものであった。

最後に、各地で校友、教会関係者をはじめ多くの方々にご協力をいただき、講演会を開催できたことに感謝したい。

（創立130周年記念事業委員会事務局）



東京新島講座講演会

学部）が19日は「千里の志―新島襄の人と思想―」、20日は「同志社130年―建学精神と今―」というテーマで講演した。講演には教会の関係者だけでなく、新島学園関係者や一般の方々も多く訪れ、両日で約2300人が参加した。

7・東京新島講座（2005年12月10・11日）

全国をめぐる講演会の最後の開催地は東京であった。講演会場は六本木ヒルズ（六本木アカデミーヒルズ49階タワーホール）、日本有数の名所である。東京と同志社の関係がよく知られていることは、新島がかつて法学部を東京に置くことを希望していたことであろう。今回は記念事業実施にあたって、学校法人同志社が開催していた東京新島講座の名を借り受ける形になった。

今回の展示では新島を広く知ってもらうために、なるべく新島や同志社のことを網羅できる展示を目指した。特に同志社の伝統や建学の精神を感じることができ資料に重点をおいた。両日で約240人が来場した。

講演の講師は北垣宗治教授（大学名誉

同志社の国際主義教育を考える

―記念シンポジウム「同志社での国際化教育」

古城 正裕

国際中学校・
高等学校教諭

同志社創立130周年と同志社国際中学・高等学校創立25周年という一つの節目を迎えた。英学校としてスタートした同志社の理念の一つ「国際主義」を改めて考える機会を持つとシンポジウム「Cross-cultural Education at Doshisha ~Fostering Young Minds for Tomorrow~同志社での国際化教育」これからの国際人に向けて」を京田辺市の同志社女子大学内にある新島記念講堂で開催した。主催は学校法人同志社の国際主義教育委員会である。

第1部 基調講演

「100人の村、
あなたもここに生きています」

池田香代子

第1部は、再話をまとめ上げたベストセラー「世界がもし100人の村だったら」の著者で、作家・翻訳家の池田香代子氏の基調講演であった。アメリカ人同時

テロ事件やアフガン紛争にショックを受け、「世界がもし100人の村だったら」を出版したとのこと。世界に暮らす人々が何十億人というスケールでは何かとイメージしにくいことが多いが、100人のサイズに縮小して考えるとずいぶんイメージしやすくなる。つまり、どれだけ多くの人たち、どれだけ少ない人たちがどのような暮らしをしているかを百分率

のようにして置き換えると割合的なイメージを作ることができるため、ずいぶんイメージしやすくなるのだ。すると、そのイメージしやすくなった数は、世界がどのような状況にあるかを魔法のように理解しやすいものにしてくれる。

講演の中で、世界にはいかに多くの言語が使われ、いかに多くの宗教があるのか、どれほど多くの人種が共存しているのか、そして、色々な人々がどのような生活をしているのかが紹介された。中でも、世界の富が一部に集中していること、そして、貧困で苦しむ人がいかに多いかという訴えには特に感動させられた。著書による3000万円を越した印税は、「皆さんから私に預けられたお金。私た

ちは『無力』ではない。『微力』なんだ。1冊数十円の印税でも、積み重ねていけば大きな力になる。」と強調された。多数の人の中に個人を埋没してしまいがちな私たち日本人。小さな力であるかもしれないが、私たちにできることを教えられた。それと同時に、世界の一員としての私たちのあり方と国際的視野の育み方を示唆してくれた。

「欧米化」(イコール)「国際化」と考えられていた時代はすでに過ぎ去った。アジアに位置する日本。欧米だけに目を向けるのではなく、日本が犯した戦争に対する責任からの観点に立った教育も必要。世界規模で社会を観察できる力を養い、ゆがみのない意見が持てるように教育を押し進めたいと考えさせられた。

第2部 パネル・ディスカッション

学内の香里中学・高等学校、女子中学・高等学校、中学校、国際中学・高等学校の4中高の外国語担当者が生徒の国際的な資質をいかに高めていくかについて考えた。その準備は、校祖新島襄先生

が「国際」をどのように考えたのかという研修から始まった。パネリストの事前研修会では「国際人」として要求される資質とは何か「また、それをどのようにして育てればよいか」について考え、パネル・ディスカッションに準備した。



6人のパネリストによるディスカッション

●基調講演者プロフィール●



池田 香代子

(いけだ・かよこ)

ベストセラーになった「世界がもし100人の村だったら」の作者。その印税で「100人村基金」を設立し、基金を必要としている世界中の人たちに支援活動を行う。また、アフガン難民キャンプ内の女子校も支援。専門はドイツ文学翻訳、口承文芸研究。世界平和アピール七人委員会メンバー。

職歴・経歴・著書：
1948年東京生まれ。ドイツ留学後、早稲田大学、中央大学などで非常勤講師を務めた。米国の環境学者ドネラ・メドウズのコラムがインターネットに流れ、受け取った人々により加筆されたメールを、2001年に修正、再話し、「世界がもし100人の村だったら」として出版。ベストセラーとなり、2002年にはパート2、2004年にはパート3が出版されている。パート1とパート3の印税で「100人村基金」を作り、日本国内の難民申請者の支援活動や、パレスチナに給水タンクを贈るNGO・ネパールの小学校などを支援している。日本口承文芸学会・日本文芸家協会所属。1998年、ピリンチ「猫たちの森」で第1回日独翻訳賞受賞。世界平和アピール七人委員会メンバー。著書に「哲学のしずく」など、訳書に「グリム童話集」(全5巻)「エーミールと探偵たち」「ソフィーの世界」「夜と霧」「やさしいことばで日本国憲法」「母さん、ぼくは生きています」など。新刊に「11の約束—えほん教育基本法」(共著)がある。

●パネリスト紹介●



イアン・キャリー
アマン
(イギリス・香里中
高特任教員)



デイビッド・フォ
ウマン
(ニュージーラン
ド・中学教諭)



ティフニー・キタ
ワキ
(アメリカ・国際中
高嘱託講師)



オーエン・スミス
(オーストラリア・
国際中高特任教員)



シュベネマン大島
借美
(日本・国際中高嘱
託講師)



ローズマリー・ヴ
イダー
(スイス・国際中高
嘱託講師)

に書かれたことをノートに写す形式ではない。先生からの問題の投げかけに對してどのように考えるかなど、生徒は意見を頻繁に求められるとのこと。黙って聞いているだけではなく、常に意見が言えるように準備しておらなければならぬ。つまり、生徒が常に授業に参加していなければならないことになる。

次は、個人主義とアイデンティティに關して。日本と比較をすると、パネリストの国では個人主義的思考が強いよ

うだ。そして、国際社会を見てみると、集団としてではなく、個人としての力量が問われることが多いとのこと。そのため国際社会で活躍するには、積極的に自己表現できる力が要求されてくる。

その反面、個人主義でありながら、日本と比較して、周囲がひとりひとりの個性を大切に扱うことは興味深い。自分が意見を言うためには、他者の意見に耳を傾け、違った意見を受け入れ、相手のことを思いやったコミュニケーションの能

力が要求されるとのこと。中でも最も興味深かったことは、海外の文化ではなく、自文化に對して強い関心を持つ人のほうが国際人として大きな成長が期待できるというデーターの紹介。

「内」「外」という概念で外国を見ることは、日本人が国際人になるために足かせとなるようだ。日本が島国であることが原因で「内」「外」の概念を気づき上げやすくしていることは、一般的によく

述べられる。しかし、他国でも島国は多くあり、山に囲まれているスイスでもそういう島国という考え方があろう。しかし、国際化を推し進める上で、その概念が日本ほど足かせとなっていないのはなぜか問う必要がある。

第3部 意見交換会

第2部に引き続き、第3部は Refreshments。国際的な資質をどのように育てればよいかについて参加者とパネリストが自由に意見を交換できる会を新島記念講堂隣の聴恵館1Fラウンジで行った。クッキーと紅茶でリラックスした雰囲気の中でバリア・フリーに討論できたことは今までに経験したことのない



第3部 Refreshments：意見交換会の様子

新鮮な空気を感じた。

第1部と第2部とは、同志社学内中高の教職員、保護者、生徒など約80人が参加したが、教職員

研修として位置づけられていたにもかかわらず、参加した教職員があまりにも少なく、その関心の低さを大変残念に思った。

同志社の国際主義教育

同志社の教育理念のうちで「規則で縛り上げるのではなく、自主自立の精神を育くむ教育」は、国際性を高める上で大変役立つと思う。つまり、集団の中に個性を埋没させるのではなく、自ら判断して、考え、自分の意見をはっきりと述べて、これはまさに国際人として要求され

る資質であるからだ。今後、中高において、静かにノートをとるだけでなく、個人の意見が求められるような授業が展開されていけば、さらに同志社の国際性を高めていくことができると思う。

また、同志社がキリスト教主義の教育を行っていることも重要である。上記のように、個人の意見が求められるほど、多くの個性が表面化する。その中で、集団に属さない少数派の意見や自分とは違う他者の意見に對して耳を傾け、受容する姿勢やコミュニケーション能力が要求されてくる。

一人ひとりを大切にしながら、自分とは違う考え方をを持った人に真正面から向き合う他者理解は、国際理解の基となる。国際人を作り上げていく上で「自主自立の精神」「キリスト教主義」など、同志社がもつとも得意としている分野が有効に利用されたい。

時は流れても、決して振り回されない同志社の教育理念は国際人育成にしっかりと生かすことができる。